



Japanisch-Deutsche Gesellschaft

Die Brücke 架け橋

日独協会機関誌



12
2025

表紙の言葉

今年最後の会報誌ですので、表紙には今年実施した活動の写真をコラージュしました。

定期的に開催されている勉強会などもあわせると、なんと今年1月から11月末時点で65のイベントを開催、12月末までで70以上を行うことになります！この他にもドイツ語講座も年70クラスを開講しました。

活動に参加された方々の笑顔の裏には、運営や企画担当者、サポートしてくださっている方々の尽力があります。皆さま、いつもありがとうございます。

今年もいろいろありがとうございましたが、残すところあと少し、元気に頑張っていきましょう！

菊池 菜穂子（日独協会職員）

Zum Titelbild

Da dies die letzte Ausgabe des Jahres ist, habe ich Fotos von den diesjährigen Aktivitäten für das Titelbild zusammengestellt.

Zusammen mit den regelmäßig stattfindenden Studiengruppen haben wir von Januar bis November 65 Veranstaltungen durchgeführt und bis Jahresende werden es über 70 Veranstaltungen sein. Außerdem haben wir auch mehr als 70 Deutschkurse durchgeführt.

Hinter dem zufriedenen Lächeln der Teilnehmenden stecken die engagierten Bemühungen der Verantwortlichen, Planenden und Unterstützenden. Vielen Dank an alle!

Es ist viel passiert in diesem Jahr, aber bis zum Jahresende sind es noch ein paar Tage übrig. Lasst uns fröhlich weitermachen!

Nahoko Kikuchi (Angestellte der JDG)

目 次

ページ／Seite

INHALT

レポート：ドイツ大使主催「夏祭り」	森 宏之	1	Bericht: Sommerfest	Hiroyuki Mori
協会活動報告		2	JDG-Aktivitäten	
大阪・関西万博開催記念 特別企画		4	Anlässlich der Osaka-Kansai Expo: Sonderprogramm	
東西ドイツ統一35周年記念 特別企画		5	35. Jubiläum der Wiedervereinigung von Ost- und Westdeutschland: Sonderprogramm	
文化の玉手箱 『ベートーヴェン捏造一名プロデューサーは嘘をつく』	小野 さと子		Kulturtkiste: „Erfundener Beethoven – oder Biographie von Anton Felix Schindler“	Satoko Ono
最新のミュージカルのテーマは なんとあの女帝「マリア・テレジア」	今井 謙	6	„Das neue Musical: Es geht um die Kaiserin Maria Theresia!“	Ken Imai
私とドイツ File 31	田野 武夫	7	Deutschland und ich File 31	Takeo Tano
ベルリン日独センター(JDZB)の40年 – 昨日から今日へ、そして明日へ	ユリア・ミュンヒ	8	40 Jahre Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB) – Gestern, heute, morgen	Julia Münch
日独の若者が未来を語る ドイツ、こんなトコロに行ってみた Die Loreley	柚岡 一明 葛山 文	9	Junge Japaner und Deutsche diskutieren über die Zukunft Deutschland, da und dort: Die Loreley	Kazuaki Yuoka Aya Katsurayama
ベルリナーラフト：ベルリンに秋がくると	Dr. ヴェレーナ・マテルナ	10	Berliner Luft : Wenn es Herbst wird in Berlin	Dr. Verena Materna
ドイツ経済の動き 第96回	伊崎 捷治	11	Tendenz der deutschen Wirtschaft (96)	Shoji Isaki
Mel's Kangeki(研修生コラム)	メラニー・シェーファー	12	Mel's Kangeki (Die Kolumne der Praktikantin)	Melanie Schäfer
お知らせ	事務局	13	Informationen	Sekretariat der JDG

レポート

ドイツ大使主催「Sommerfest（夏祭り）」
Sommerfest

9/17 (水) 18:00 ~ 20:00 ドイツ大使公邸
Datum: Mi, 17. 9. 2025, 18.00-20.00 Ort: Residenz des deutschen Botschafters
森 宏之 (日独協会理事)

長く暑かった夏の日々のフィナーレを飾るかのように、ドイツ大使主催の「夏祭り」が9月17日(水)に開催され、全国の日独協会会員約100名が広尾の大使公邸に集いました。当日は、各協会の運営を担うベテラン会員に加え、昨年ベルリンで開催された「日独パートナーシップデイズ2024」や、今年8月にドイツで行われた日独交流イベント「ハロープログラム」に参加した若手会員も出席し、会場は活気に満ちた雰囲気に包まれました。

開会にあたり、ジグムント大使より歓迎のご挨拶があり、ドイツ政府が対日関係を重視し続けている姿勢が改めて示されました。今年に入ってからも、シュタインマイヤー大統領やヴァーデフル外務大臣をはじめとする政財界の要人が相次いで来日していること、また大使自身も日本各地を精力的に訪問し、地域レベルでの交流を推進していることが紹介されました。続いて、(公財)日独協会・東原会長による答礼スピーチと乾杯の発声が行われ、若手会員への期待と今後の協会活動への意気込みが語られました。その後、ジグムント大使への花束贈呈が行われ、和やかな雰囲気の中、ビュッフェタイムへと移行。ビールやワインを片手に、参加者同士の歓談が弾み、約1時間半にわたり賑やかな交流の場となりました。

当日は蒸し暑さが残る気候ではありましたが、屋内の情報交換や世代間の対話が活発に行われ、各地の日独協会間の連携強化にもつながる有意義な機会となりました。最後には全員で記念撮影を行い、名残惜しみつつ閉会となりました。以下に、参加された会員の感想をご紹介します。



参加者で集合写真



左:ジグムント大使(左)と東原会長(右)
右:大使を囲んで歓談する参加者たち

支援に感謝し、未来へ

阿部 菜月 (日独ユースネットワーク会員)

日独協会の会員の皆様におかれましては、ジグムント大使主催の「夏祭り」にて貴重なひとときをご一緒させていただき、心より御礼申し上げます。大使のご挨拶の中で光栄にも日独ユースネットワークの活動に触れていただき、身の引き締まる思いで拝聴いたしました。歴史と品格のあるレジデンスにてシェフのお料理を堪能し、その温かいご歓待に心から感激いたしました。

とりわけ印象に残っているのは、会員の皆さまと直接お話しでき、私どもの活動に耳を傾けていただいたことです。対話を通じて歩みを振り返るとともに、新たな視点や可能性をいただけたことは大きな学びであり、今後の活動を進める力となりました。日独関係において若者が担う役割は極めて大きく、その力を発揮できるのも皆様の温かいご支援あってのことと実感しております。おかげさまで今年のハロードイツも無事成功裡に終えることができました。今回の経験を糧に使命を新たに胸に刻み、これからも活動に励んでまいりますので、今後とも温かいご指導ご支援を賜れますと幸いです。

日独の平和と友情の夕べに乾杯…

野口 久美子 (日独協会会員)

「え～！ドイツ大使公邸で夏祭り～!?」会員一年生、ドイツ語も口に出来ない(謙遜なし)。身に余るご案内を拝読し警報級の冷や汗でしたが、想い出のハイレベルな生活が甦る素晴らしい夕べでした。

今年は既に大統領、外相の訪日が実現し、二国間関係の発展と強化が際立っていることをジグムント大使閣下のスピーチで拝聴し、長きにわたる堅固な日独関係を目の当たりに致しました。また、大使閣下が参加者の半分は女性に、というご意向も大変有難く、目を見張るような最高に美味しいドイツ料理等温かいおもてなしに満ちた稀有な機会を頂く事が出来ました。

また、ドイツ語圏に大変造詣の深い影山様、末岡様、杉山様、宮地様とお目にかかり、ワイン片手にお喋りの花も咲き、後半は(若干)千鳥足でした…。個人的には、大使閣下や通訳官の方に戦前・戦中と大伯父と祖父の編集・発行していた雑誌「日獨旬刊」をお見せする事ができ、今は亡き彼らも喜んでいると思います。今、平和こそ尊く、日独のこの平和な関係も大使閣下、ドイツ大使館、日独協会の皆様の日頃のご尽力の賜物と確信しております。

ドドンとドイツ！！10回記念×ドイツ統一記念日 SP

10/13(金) 19:00 ~ 22:00 東京カルチャーカルチャー

Dodon to Doitsu!! 10. Jubiläum × Tag der Deutschen Einheit – Spezial**Datum: Fr., 3. 10. 25, 19.00-22.00 Ort: Tokyo Culture Culture**

10回目を迎えた「ドドンとドイツ！！」は、ドイツ統一記念日の開催。渋谷の東京カルチャーカルチャーに着くと、既にイベントを楽しみにしている方で満席。さらにこの日は、物販飲食コーナーも本や、グッズ、どっしり重いドイツパンや、カリーブルストやドイツビールまで。始まる前から楽しい！

まずは体を張って（！？）試してきたドイツ料理の紹介を始める伸井さん。ドイツ料理は美味しいかどうか、なかなか難しい投げかけでスタートをし、「公務員のご飯」、「貧しい騎士」等と名前がついた料理のスライドが進み、客席から険しい表情。一番どよめいたのが「Tote Oma（死んだおばあちゃん）」という料理。ご飯自体は豚の血のソーセージとマッシュポテトで味は悪くはないらしい。なぜこの料理名をつけ、なぜ変えないのか会場全体が怪訝な空気で包まれる。ここで、ドイツ人の食への熱量が“おいしく”ではなく“栄養補給”と説明され、料理名含めおいしさにこだわらないのか、と納得させられてしまう。

後半は、神島さんによる政治パート。AfDがこのまま躍進するのか、移民問題はどうなるのか、EUでの立ち位置は等のトピック。両国を行き来される登壇者の皆さんならではのリアルな声。ニュースとは違う温度感で拝聴し、思っている以上に混迷を極めていることがわかり、日本も既に直面しつつある問題として聞いていてざわっとした。

最後は、マライさんの「ドイツ人が永久的に推しているモノについて」。シュラーガー (Schlager) というのを聴いたのは正直なところ初耳。日本で言うところの「昭和歌謡+演歌+ユーロビート」だそうだが、なかなか浅いのか深いのかわからない世界。シュラーガー音楽の鉄則の一つ「裏拍子ってなんですか？我々には1-2-3-4しかできません」というのを聞き、なるほどと苦笑する。でも主たることはみんなで楽しめる音楽なのがわかり、触れる機会があればぜひ一緒にステップを踏みたい。

今後も、ドイツを斜めに愛せる唯一無二のイベントとして、末長く続けて頂きたい。

小出 麻子（参加者）

様々な角度からドイツに切り込む登壇者たち

キャリア形成セミナー（実践編）

10/18(土) 15:00 ~ 17:00 日独協会セミナールーム

Seminar zur Karriereentwicklung**Datum: Sa., 18. 10. 25, 15.00-17.00 Ort: Seminarraum der JDG**

日独協会ではこれまで「ドイツでの就労」をテーマに継続的なキャリアセミナーを実施しており、会員にとってドイツでのキャリア形成は大きな関心事の一つである。今回は、同セミナーをきっかけに昨年ドイツでの就職を実現した中村奈々海氏を講師に迎え、現地でのキャリア構築や生活の実情について語っていただいた。参加者は約20名で、学生や30代の社会人が中心であった。

中村氏からは、渡独準備の過程、最初に勤務したドイツ系会計事務所ジャパンデスクでの業務内容、現在勤める半導体関連の日系商社での仕事内容などが実体験を交えて紹介された。また、就職活動の方法やビザ取得の手続き、「チャンスカード」制度など、最新の制度についても詳しく解説された。さらに、行政手続き上の留意点、日本とドイツの職場文化の違いなど、参加者の関心が高いテーマについて多くの質問に答えられた。

田野武夫・拓殖大学教授からは、同大学でのドイツ語履修学生への就労支援の取り組みが紹介された。また、ドイツ現地企業に勤務する所親宏氏もオンラインで参加し、IT業界の現状や就労手続きについて昨年に続き具体的に解説いたしました。

本セミナー共同実施者の樋上雅之評議員は「就労における英語の重要性」を強調し、中村氏について「専門的知識よりも前向きな姿勢と実行力が成功の鍵」と評価した。中村氏も「さらなる専門知識を習得し、現地でのキャリアを築きたい」と抱負を語った。

終了後には懇親会も開かれ、個別相談や情報交換の場として活発な交流が行われた。「キャリア形成セミナー」は若手会員を中心に関心が高く、今後も現地で活躍する日本人就労者を講師に迎え、継続的に開催される予定である。



講師の中村奈々海さん

ドイツ語講習会 2025 年度下半期コース

月～日曜日

Deutschkurse in der JDG, Oktober 2025- März 2026
jeden Mo.-So.**ドイツ時事問題研究会**

10/18(土) 15:00 ~ 17:00

Studiengruppe "Deutschland aktuell" (114)

Datum: Sa., 18.10.25, 15.00-17.00

1. 今月の主なトピックスは、①自動車および関連産業の不振 (Bosch 社の人員 2.2 万人削減、VW 社の生産削減など)、②主要経済研究所が共同経済情勢診断で若干のプラス成長はあるが、構造改革の進展がカギとの見解、③進展しないメルツ首相の「改革の秋」④兵役対象者の選定をめぐる議論の動向、⑤トヨタとダイムラー・トランク社の大型提携、⑥高まる 2035 年脱化石燃料車の延期論などについて報告し、質疑応答を行った。

2. 今月のテーマは「移民の歴史と人材受け入れの現状」と題して、伊崎から過去のポーランドや日本からの鉱山労働者の受け入れ、いわゆる「外国人労働者の募集」、2000 年から始まったグリーンカード制を経て積極的な人材受け入れに転じた 2005 年移民法の発効、現在の専門人材移民法の概要などを説明。活発に議論した
(伊崎 捷治)

シュプラッハトレッフ (日独言語交換会)

10/18(土) 19:00 ~ 20:40

Sprachtreff

Datum: Sa., 18.10.25, 19.00-20.40

今回から、10 月からの研修生メラニーさんが、スタッフの芦野さんと担当しました。今回のテーマは「食欲の秋」「芸術の秋」でした。もちろんそれ以外のテーマで話しても問題ありませんでしたが、開催後、「とても良いテーマだった」という声をいただきました。また、「サポーターが素晴らしいので、活発な意見交換ができた」、「言語だけでなく、文化の相互理解や敬意ある交流も育む、素晴らしい交流」というポジティブなご意見を特にドイツ側の参加者からいただきました。グループの人数についてもご指摘がありましたが、スタッフが事前にグループ内の日独の比率やレベルを合わせるように調整していく中、直前のキャンセルや当日の欠席で思ったようなグループができなくなることが多く、頭を悩ませています。参加者にはなるべく直前や当日のキャンセルをしないようお願いいたします。

今回、1 つのグループの中で、好きな漢字を事前にのり、それを書道の先生をしている参加者が書いて、当日お見せしたところ大変盛り上がったそうです。この言語交換会が参加者の皆さん工夫でとても楽しい会になっているのを感じました。

懇談会サロン テーマ：「日独交流の原点とは？」

10/20(月) 18:00 ~ 19:30

Gesprächssalon „Wo liegt der Ursprung des Austauschs zwischen Japan und Deutschland?

Datum: Mo., 20.10.25, 18.00-19.30

講師：瀧沢敬三氏（当協会会員） 参加者 17 名

早稲田大学ドイツ研究会の 4 人のメンバーが、「自分たちの目で西ドイツを見てみたい」の熱い思いを実現させたのが「西ドイツ一周研究旅行」でした。今から 61 年前、1964 年の東京オリンピック直前に出航した 33 日間の船旅と、約 4 か月半に 64 都市を巡り、大学 18 拠点での講演・交流と大変スケールの大きな日独交流でした。

この長旅の記録は、2018 年に『西方見聞録 1 - 4』として自費出版され、その第 2 卷の「西ドイツ一周研究旅行記」が、2021 年にはドイツ語版 (Iudicium 刊) として刊行されました。「造本装幀コンクール」歴史部門で入賞を果たし、最近ではドイツのウェブメディアでも的確な書評が紹介されています。交流の原点はやはり、人ととの生活文化に触れ合うこと。その大きさと、その時に感じた思いを記録として後世に残すことの意義を改めて感じた講演でした。
(木田 宏海)

独逸塾

10/20(月) 19:00 ~ 21:00

Gesprächskreis: Neuigkeiten aus Deutschland

Datum: Mo., 20.10.25, 19.00-21.00

参加人数 18 名

1. テキストは 2025 年 7 月 25 日の Euronews の記事 Deutschlands neue Wehrpflicht zwischen Pflicht und Freiwilligkeit

ドイツでは兵役制度が 2011 年に廃止された。ロシアのウクライナ侵攻で防衛意識が高まり 2031 年から最大 4 万人の新兵を募るあらたな兵役制度を導入する予定。将来的には全体の規模は 46 万人うち現役 26 万人、予備役 20 万人を目指している。新制度はスウェーデンモデルを参考にしており若者の国防参加を促す狙いがある。社会の責任と個人の自由の間で議論があり国防強化と民主的価値の両立が課題となっている。

2. テキストは 2025 年 6 月 28 日の ZDFheute の記事 Zurück zur Wehrpflicht? Was junge Menschen sagen
若者の意見は多様で軍に懐疑的な意見もあり、社会貢献、団結の機会として肯定的にとらえる人もいる。

3. テキストは 2025 年 8 月 22 日の SPIEGEL 誌の記事 Was wird aus Milliardenfabrik ?

ブランドンブルク州のグリューンハイデにあるテスラ社の工場はその地方の希望の星であった。現在ここで生産される電気自動車の売り上げは大幅に後退しておりテスラ社の大工場はかってないほどの疑惑に直面している。ドイツ政府が数十億ユーロを投じて進めるテスラの工場建設は補助金の遅れや地元の反対、国際競争の激化により停滞。経済成長と環境保護の間にあり、実現には政治的調整と産業界の協力が不可欠である。ドイツ語の表現をめぐり活発な議論が交わされた。
(森永 成一郎)

※会場が書かれていないイベントはオンラインで開催されました。

ぶらドイツ in 秩父 10/25(土) 10:00 ~ 17:00

Buradoitsu in Chichibu Datum: Sa., 25. 10. 25, 10.00-17.00

久保健（日独協会会員、鉄道史学会会員）

ドイツと関係する場所を訪ねる「ぶらドイツ」、今回は埼玉県秩父にて10月25日（土）に開催しました。まず西武秩父駅に集合し、明治時代の建物が多く残る参道を通り、秩父神社へ向かいます。秩父は1930年代にヒトラー・ユーゲントが、現在は芝桜で有名な羊山を開墾したとされ、武甲山をバックに制服をまとった若い男女が鍬を持ち、地元の青年達と共に作業をしている写真が残されています。ただヒトラー・ユーゲントは1938（昭和13）年に来日していますが、秩父に来た記録は無く、青少年で構成されていたヒトラー・ユーゲントに女性がいるのもおかしな話です。そうなると、この写真是なんなのでしょうか？後日、ご参加された方から、当時日本に滞在していたドイツ人子息のグループでは、とのご意見をいただきましたが、非常に気になるところです。

昼食後、秩父鉄道で長瀧まで移動です。秩父鉄道は1911（明治44）年に熊谷から秩父まで開業しますが、建設時にドイツから資材を輸入しており、現在でもグループ社やグーテホフヌングスヒュッテ社製の線路が架線柱として残されています。また寄居と波久礼間にある逆川橋にもグーテホフヌングスヒュッテ社1902年製の銘板も残るなど、ドイツとの縁の深さが感じられます。長瀧は「日本地質学の父」ナウマン博士が訪れており、長瀧町観光協会野崎様より、埼玉県立自然の博物館の見学をしつつ、博士とお弟子さん達がいかにこの地を重要視していたのか教えていただくことができました。最後は長瀧駅からSLパレオエクスプレスに乗車です。1944（昭和19）年製の蒸気機関車に引かれ、時折汽笛も聞こえる中、荒川沿いの渓谷をのんびりと走り終点熊谷駅に到着、解散となりました。小雨交じりでしたが、空いた名所を落ち着いて巡り、素晴らしい1日を過ごすことができました。参加いただいた皆様はじめ、関係者には心から御礼申し上げます。



埼玉県立長瀧自然の博物館の「日本地質学発祥の地」の石碑にて



SLパレオエクスプレスが長瀧駅に到着



大阪・関西万博開催記念 特別企画

万博開催を記念して、これまでの万博での日独に関する思い出やエピソードを募集したところ、愛知万博でドイツ館スタッフとして働いた貴重なご経験や、万博が後押ししたご縁について素敵なおエピソードをお寄せいただきました。

内側から見たドイツ館のよもやま話

私は2005年の愛・地球博でドイツ館スタッフでした。会報誌に大阪万博ドイツ館スタッフのインタビュー記事が掲載されていたのを懐かしい思いで拝見し、今回初めて投稿しました。

当時の運営は各国異なっており、アメリカのように企業出資でスタッフの食住が提供されるかわりに低賃金の国もあれば、ドイツのように月給をしっかり受け取れる代わりに全て自分で対応するようという国もあります。館は完全にドイツで、コピー用紙から掃除機に至るまで本国から送られていました。

開催前には、NHKドイツ語講座テキストの読み物コーナーで紹介するため、ローラーコースターに乗っているお客様という体で私も他のスタッフと共に私服でカメラに収まりました。また会期中には、万博HPにアップするための各館動画用に、ドイツ人スタッフと館の紹介もしました。勤務は4日ごとの早番遅番シフト制で、切替えの間は1日休みがあつたため、4日目早番シフトあがりに他の館を訪問したものです。また、館によっては閉館後にスタッフ向けパーティーが開催され、他館との交流もできました。

もちろんトラブルもありました。機械に優しい気候で生まれた館内乗り物は、夏になると頻繁に停止したのです。停止の度に、乗客は自力で梯から降りる必要があり、当時の天皇皇后両陛下にご来館いただいた日は、

スタッフ全員で乗り物が停止しないことを心からお祈りしたものです。停止時は乗車待ちのお客様にコピー用紙にスタンプを押し手書きで番号を書いただけの“優先権”を配布し、次回は優先して乗車いただけるようにしました。すると、この紙“優先権”がネット競売されるようになり偽物も出回り始めたのです。ここで、ドイツ製備品の使用が功を奏します。このコピー用紙が日本製と手触りが違うことで、すぐに真贋を見分けることができたのです。偽物と知らずに購入した方には気の毒でしたが、そこはドイツ！容赦なくドイツ人スタッフがお断りして列に並んでいました。日本人は外国人スタッフにはクレームしませんのです。

以上が館の日常でしたが、若い方にはスタッフとして参加することで“ドイツで働く”を是非経験して頂きたいです。



エクスペリエンスライドとい
う館内ローラーコースター



冬服の制服を着て(右が著者)



長久手会場と瀬戸会場を結ぶロープ
ウェイからの開場風景



EXPO EXPO 婚?

南 貴大（日独協会会員）

私は「万博で結婚した男」である。え？会場で式を挙げた？それとも万博ナンパ成功？答えは Nein（独語でノー）！真相は、ドイツ人妻とのご縁に万博が深く関わっていることだ。2012年に交際を始めた頃、私がふと「新婚旅行は2015年のミラノ万博に行きたい」と口にした。それが事実上のプロポーズとなったのである。プロポーズの言葉もないまま、2014年に渡独してフランクフルトで結婚式を挙げた。当時、私はドイツで仕事もなかったため、祝儀の代わりに新婚旅行資金を募ったのも今では笑い話である。さて、次は大阪万博で新婚旅行10周年を祝う番。……もっとも、当日までにチケット代を貯められるかどうかが、私たち夫婦最大の万博ミッションである。



東西ドイツ統一35周年記念 特別企画

1990年の東西ドイツ統一から35周年の今年、ベルリンの壁崩壊と統一にまつわるエピソードを募集したところ、4名の方から貴重な体験談が寄せられました。

ベルリンの壁崩壊とドイツ統一に関する思い出

M. S.（日独協会会員）

1989年11月9日の夜、東ベルリンの在東独日本国大使館の一員として、SED（ドイツ社会主義統一党）による新旅行規則の発表をテレビでフォローしていました。その内容は、西独旅行へのビザ発給要件を大幅に緩和し、親戚の冠婚葬祭といった事由がなくても申請があれば直ちに発給するというものでしたが、これを見ていた東独市民が「直ちに西側に出られる」と解釈して検問所に殺到し大群衆となつたため、やむを得ず検問所を開放せざるを得なくなつたのです。覆水盆に帰らず。統一に向けて事態が急展開する中で、面談した東独の学者は、「統一後、旧東独地域が後進地域として取り残され、政治的過激主義の温床とならなければよいが」と心配していました。その危惧は、ある意味で、現実のものとなつてしまつているのかもしれません。

ミュンヘン、そして壁の向こうカリーニングラードへ

山口 誠一（日独協会会員）

ベルリンの壁崩壊と統一時ミュンヘンに研究滞在していました。ソ連領事館前にロシア人たちの長い行列ができて、ミュンヘン大学では、非常勤講師たちが旧東ドイツの大学に職を求めていなくなっていたのを覚えています。旧閉鎖都市カリーニングラード（旧ケーニヒスベルク）にも行きやすくなつたのでモスクワ経由で列車と飛行機を乗り継いで行ってみたら、街頭では庶民が街路で物売りをやっていてケーニヒスベルク時代の建物は破壊されて軍港となっているのが印象的でした。

バラトン湖畔の夏、壁崩壊前夜

木下 信行（日独協会会員）

私は、1986年7月から、ジェトロに出向しフランクフルトで勤務していました。出身が大蔵省だったので、ドイツと日本の中小企業、とりわけ製造業に新鮮な印象を受けていました。そうした恵まれた日々の最後となる1989年6月には、帰国直前のウララウプとして、ハンガリーのバラトン湖畔に1週間滞在した。その際、オーストリアとハンガリーの国境が自由であったこと、バラトン湖畔に数多くの東ドイツ人がいることに気づいた。

当時は、東の人も休暇は楽しむだろうし、彼らにすればハンガリーは格好の行き先だと思っていたが、後から考えると、いわゆるヨーロッパ・ピクニックに居合わせたようだ。1989年冬にはベルリンの壁が崩れ、翌年には再統一を果たし、フランクフルトで私の隣人であったドイツ人も、親類縁者との再会を祝ったのである。

『英雄』をめぐる記憶

河原 美奈子（日独協会会員）

『ドイツは今に大きくなるだろう。これから行くチャンスはあるわね。』と、当時学生だった私は、統一される前から教授からよく聞かされていました。教授は70年代にドイツに声楽で留学していました。まだドイツは自分には遠く、ガイドブックを購入して写真を眺める日々でした。

1990年夏、東側のオーケストラが来日し、コンサートを聴きましたが、同教授が来て『やはり東の音楽ね、私もう帰るわ』と途中で帰ってしまいました。ベートーヴェンの交響曲『英雄』でした。私はとても美しい音楽を今も忘れることができません。後にこのエピソードをドイツ人の友人に話すと、『東側には確かにコーヒー やタバコなど、あまりクオリティがよくないものもあった。しかし、音楽や芸術はそうじゃないはず。教授は聴く耳があったのか』とのこと。私もそう思います。

会報誌 Die Brückeへの投稿募集！

1990年の東西ドイツ統一から35周年の今年、Die Brückeでは、ベルリンの壁崩壊と統一にまつわる会員の皆様からの投稿を募集しています。投稿は300文字以内で協会のメールアドレス jdg@jdg.or.jp 宛てに、または右のQRコードを読み取った先の専用投稿サイトからお送りください。メールの場合は件名を「会報誌投稿」とし、必ず氏名をお書きください。（誌上での掲載名はイニシャルでも可）。なお、全員の投稿を掲載できない可能性がある点を予めご了承ください。

